

私の被爆体験記

服部 十郎 (当時16歳)
札幌市



誤った軍国時代の教育を受けた私は、志願兵として広島市で訓練を受けていた。

8月5日、呉市が受けていた鑑砲射撃が広島に及ぼすのではないかと徹夜で警戒に当たったが、異常なく夜が明けて、兵隊たちは一部を残して就寝許可になった。

突然、巨大な力で壁に身体を打ち付けられた衝撃で目を覚まし、同僚と共に斜めになった梁や柱をくぐり、埃を掻き分け、どうやら倒壊した兵舎外に脱出した。

そこで見た周囲は地獄だった。建物は倒壊または半壊して、人々は全身を火傷と裂傷に覆われ、焼け爛れて土色に変わった皮膚をぼろ布のようにぶら下げながら、助けを求めてよろよろと歩いている。さながら幽霊のように。全身を焼かれた人々は、体の内部が燃えるような感覚だったらしい。「水を、水をください」つぶれて出ない声を必死に振り絞りながら。路傍には遺体が数知れぬ程に放置され、注意しながら歩いても、踏みつけそうになる。死体だと思った人の手がのびて、私の足首をつかむ。間もなく火災も発生して家屋を焼き尽くしてゆく。

水をあげれば、飲み下すと共に息を引き取る人。抱き起そうとする間もなく崩れ落ちる人。父親は妻子の名を呼びながらおろおろと駆け回る。出産直後の母子は乳さえも与えられず飲まず、路傍に目を閉じた。

これらの人々を救助できなかつたもどかしさ、後悔が今も胸を噛み、時折り夢に出てはうなされる。薬品もなく、原爆に対する対処方法もなかった当時、救助と言っても単に安全と思われるような物陰に、筵を敷いて横たわってもらうくらいきりできなかつたのだが。

15日の敗戦の日から程なく、広島市には居住困難という理由で、近郊

の三原市に分屯したが、その地で見た真っ赤に咲いたカンナの花と、水道の蛇口からほとばしった清浄な水が忘れられない。ああ、平和とはこのようなものなのだと、痛感したものだ。

除隊してから数年、医者も首をかしげる倦怠感、下痢、発熱、喘息などに次々に襲われたがどうにか生きてきた。今も病院は四か所かけ持ちだが。被爆者は生きなければならぬ。命ある限り原爆の実相を語り伝えなければならぬ。それが責務だ。と被爆先達に励まされながら。

悪魔の兵器である原子爆弾、核弾頭は、現在でも大国に保有され、使用も辞せぬとの論議もあるという。一旦使用されれば全世界的に放射能に包囲され、人類は滅び、地球は破滅するのだ。

人間が作った核兵器は、災厄の起こる前に人間の手で廃棄すべきだ。作らず、保管せず、使用しないという原則の元に、現在あるものは速やかにこれを廃棄し、清浄な環境に包まれた平和な地球を、次世代を担う子孫に遺すことが現代に生きる人間の責務だろう。

被爆者として、妻子を持つ者の一人として核兵器廃絶を強く訴える。